

国内九州 海外カナダ 選択修学旅行実施



発行所
福島市野田町
七丁目11番1号
桜の聖母学院
高校新聞部

号外

2019(令和元)年
11月5日発行

本年度の2年生から始まる

桜の聖母学院高校では2年生秋の修学旅行を、従来は英語科がカナダへの語学研修に、普通科は長崎を中心とする九州へ行っていが、英語科が募集停止となった今年度の2年生から、全員が国内か海外かを選択できる形に変更。その初回が先月中旬に実施され、海外組は出発日が台風19号の襲来と重なったにもかかわらず、無事渡航して日程をこなすことができ、国内海外とも充実の旅となった。



ケベック州モントリオールの市役所前広場に建つ、本校創立者マルグリット・ブールジョワ像(中央やや左)の前で

海外組は台風のため 網渡りの出発...

本校の起源は今から40年近く昔に、フランス人修道女マルグリット・ブールジョワ(1620~1700)が、当時のフランス植民地カナダに渡り、現在のモントリオールで1658年に開いた小さな学校に遡る。その学校はカナダ全土をはじめ世界に広がり、1932(昭和8)年にはカナダから5名の修道女が来日、6年後に福島で開いた「雛菊幼稚園」が本校の直接の起源で、昨年80周年を迎えた。今回の海外修学旅行は、従来英語科が語学研修で行っていた英語圏のカナダ西部バンクーバーではなく、東部のフランス語圏を訪れ、創立者が築いた町モントリオールで、創立者の遺した足跡を巡り、さらに姉妹校と交流するという、本校ならではの5泊7日のプログラムだ。

しかし出発日の10月13日の前夜、最大級の台風19号が関東地方に上陸、甚大な被害をもたらした東北地方を縦断。翌日は公共交通機関が運休し、夕方に羽田から飛ぶ予定だった飛行機も欠航という最悪の事態に。だが深夜に飛ぶ臨時便の座席が奇跡的に確保でき、6時間遅れの集合となった午後3時には、参加者53名全員が保護者に送られ福島駅に到着。再開直後の東北自動車道をバスで羽田に向かい、深夜2時の臨時便で無事カナダに飛ぶことができた。



ナイアガラの滝壺クルーズはスリル満点!

大迫力のナイアガラの滝クルーズを満喫

カナダ最大の都市、オンタリオ州の州都トロントに降り立ったのは、現地時間の深夜1時過ぎ。そこからバスで1泊目のナイアガラの宿に到着したのは、実に早朝4時。しかし多くの生徒の強い希望で6時半の起床?以降はすべて予定通り進めることに。

世界三大瀑布のナイアガラの滝は、想像以上の大迫力。滝の寸前まで近寄れるクルーズ船では、大雨のように水しぶきを浴び写真撮影も困難だったが、全員大満足。そこから再びバスでトロントに戻り、モダンな高層ビルとその間の緑地が融合した街並みを抜け、トロントのシンボル553mのCNタワーの展望レストランへ。ドーナツ型の座席フロア部分がゆっくり回転していて、360度の景色を楽しみながら食事ができる。ここで出された巨大ステーキに、肉好きは大喜びだったが、多くの生徒は食べ切れず。

紅葉のメープル街道をモントリオールへ

トロントからモントリオールへの通称メープル街道は、これまた有名なカナダの紅葉が美しい時期。私たちはカナダの大陸横断鉄道VIAに乗っての移動だったが、前日からの強行軍とクルーズの疲れ、それに時差ボケと満腹と心地よい揺れが加わって、ほとんどの生徒がまる5時間爆睡してしまった。

カナダ第二の都市、ケベック州のモントリオールはフランス語を公用語としており、街並みもヨーロッパ風。私たちはここに4泊滞在し、「北米のパリ」の秋を満喫した。



良き助けの聖母聖堂にて

数多くの教会を見学したが、圧巻だったのは何とんでもない「ノートルダム大聖堂。以前から写真でも見ていたが、実際の大きさと美しさは行ってみたいとわからない。入った瞬間、聖母マリアの色である青のステンドグラスの光と金色の装飾に、誰もが息を飲む。大聖堂の向かいには、マルグリットをカナダに誘った初代モントリオール総督メゾンヌーヴと、マルグリット生涯の友となった看護師ジャンヌ・マンズの像もそびえていた。



誰しもが圧倒される、モントリオールのノートルダム大聖堂

ノートルダム大聖堂からマルグリット像(一番上の写真)を挟んで数百mしか離れていない「良き助けの聖母聖堂」は、小さいながらも築約340年の、モントリオール最古の教会。祭壇脇にはマルグリットのお墓があり、隣接してマルグリット記念館もある。これまで本校の創立者としては聞いていたマルグリット・ブールジョワが、現地でいかに尊敬されている偉人か、改めて実感することができた。

姉妹校を訪問

この修学旅行が単なる海外旅行とは異なる最大の特徴は、マルグリットが創設した修道会で本校の設立母体である「コングレガシオン・ド・ノートルダム(CND)」の総本山と言える本部修道院を表敬訪問したり、CND設立の姉妹校を訪問し交流するプログラムだ。この日は全員制服で。総本部では日本のCNDの生徒として大歓迎を受けた。

モントリオールにいくつかある姉妹校の一つ「ヴィラマリア高校」への訪問・交流は、本校の歴史でも初の試みだそう。同年度の女子生徒約20名が迎えてくれ、互いの学校紹介を英語でプレゼンした後、テーブルを囲んで昼食をとりながら歓談。何とか意思疎通できたものの「もっと英語ができるようになりたい！」と痛感。ヴィラマリアの生徒の案内で回った校内見学も、カナダの学校の雰囲気



CND総本部玄関にて、スタッフやシスターたちと

を味わえたひと時だった。



ヴィラマリア高校では本校生徒が日本舞踊を披露

最終日は首都オタワへ

暴風雨の朝となった実質的に最終日の17日には、モントリオールから約200キロ離れた首都オタワにバスで往復。ここも本来なら道中の紅葉が美しいが、天気が悪く残念。オタワでは国会議事堂を約30分のツアーで見学。午後を訪れたカナダ歴史博物館は、期待していなかったが興味深い展示の数々に、英語とフランス語の説明しなくても十分に見応えがあり、もっと長く見学していたかった。

翌18日には名残惜しいモントリオールを後にし、2年前から日本への直行便が飛ぶようになったトルドー国際空港から成田へ。終わってしまったような一週間だったが、物凄く中身の濃い修学旅行だった。

(報告:大槻はな)

国内は定番の長崎・熊本へ

長崎の町と美味しい食事を堪能

国内修学旅行は例年通り九州方面で、参加者は小回りの利く31名だった。出発日の10月15日にはもう台風の影響を受けることはなく、3日目のハウステンボスと吉野ケ里遺跡で雨にたたられたものの、全般的に天候に恵まれた3泊4日間となった。

長崎市は港を中心に、三方を稲佐山(いなさやま)・鍋冠山(なべかんむりやま)・風頭山(かざがしらやま)の山々に囲まれた「すり鉢状の地形」で、平地が少なかったことから山の斜面に住宅地が広がる、ユニークな街並みとなっている。町全体に坂が多いため、長崎の人々の主な交通手段は、バス、路面電車、バイクで、自転車はあまり使わない。



長崎市内の北部、爆心地や浦上天主堂にも近い、平和公園の平和祈念像の前で



ハウステンボス歌劇団の皆さんと。後列中央が伊織はやとさん

初日の夜は、すり鉢状の地形により多方面から眺めることができる、モナコ・香港と並んで「世界新三大夜景」の美しい長崎の夜景を、バスの車窓から見学した。また長崎は非常にエキゾチック、異国情緒漂う町。海外に行かなくても、ハウステンボスや出島でオランダ、中華街で中国、佐世保バスターでアメリカを感じることが出来る。さらには浦上天主堂や昨年世界遺産に指定された大浦天主堂、二十六聖人殉教碑などを訪れ、カトリック学校ならではの学

びを深めることもできる。私たちの先輩の本校卒業生である伊織はやとさんがトップを務める、ハウステンボス歌劇団の華麗な舞台も楽しめた。長崎の魅力は、美味しい食べ物にも詰まっている。カステラやちゃんぽんは王道、四海楼での中華料理、ハウステンボスのチーズケーキ、またホテルでのご馳走食べ放題も最高。日本人の舌にあっという間に決して引けを取らない。

被爆者原田さんのお話を聞いて

初日、長崎原爆資料館を訪れたあと原爆被爆者として語り部活動を行なっている、原田美智子さんのお話を伺った。歴史の教科書やテレビで見ると断片的・間接的なものとは違いリアルで、原爆の惨禍はやはり筆舌に尽くしがたいものだった。しかし戦争という負の歴史から目を背けたり風化させたりせず、向き合い続けることが、平和への第一歩となることは間違いない。

現在、年代的にも語り部の方たちの話を聞けることは貴重な体験である。若い世代である私たちが次へと平和のバトンをつなぐ番ではないだろうか。人の心の中にあるいじめや差別する心が争いにつながる、と原田さんは言う。戦争を起し、終われば平和条約を結び、また戦争をする。悲劇が起きて過ちを知る。人間の心は何と脆いと痛感した。

現在、年代的にも語り部の方たちの話を聞けることは貴重な体験である。若い世代である私たちが次へと平和のバトンをつなぐ番ではないだろうか。人の心の中にあるいじめや差別する心が争いにつながる、と原田さんは言う。戦争を起し、終われば平和条約を結び、また戦争をする。悲劇が起きて過ちを知る。人間の心は何と脆いと痛感した。

熊本では復興途上の熊本城を見学

佐賀県の吉野ケ里遺跡を見学した後は、最後の宿泊地熊本へ。ゆるキャラ好きにはくまモングッズのお土産がびつたり。最終日には、私たちが訪れる直前に一般公開が再開された、再建途上の熊本城を見学。3年前の大地震から立ち直ろうとしている熊本に、東日本震災で被災した私たちの福島を重ね合わせた。

今回の台風19号の被害もまだ続く中、私たちは「災害列島」に生きていることを自覚し、最悪の事態への備えと被害が起きた時の支援を最優先にする社会を築くことが、これからの時代には不可欠なのだと感じさせられた。

(報告:菅野岬希)



原田美智子さんの講演を真剣に聞く生徒たち



再建中の熊本城をバックに